

パッチギ!

2005(平成17)年1月30日鑑賞心齋橋パラダイスクエア

★★★★



監督・共同脚本=井筒和幸/原案=松山猛/音楽=加藤和彦/出演=塩谷瞬/高岡蒼佑/沢尻エリカ/楊原京子/尾上寛之/真木よう子/小出恵介/波岡一喜/オダギリジョー (シネカノン配給/2004年日本映画/119分)

第4章

SHOW・HEYお得意の社会派映画

……主人公たちは京都の朝鮮人学校の高校生。時は1968年。私が19歳、大学2回生の時代だ。流れる音楽は、あのザ・フォーク・クルセダーズの名曲「イムジン河」。語られるセリフも今では「死語」となったなつかしい言葉がいっぱい！ 話題作となった『血と骨』(04年)とは全く違う視点から、朝鮮人問題を楽しくも切なく(?)考えさせそしてホロリとさせる井筒和幸監督特有の切り口は新鮮！ こんな映画、私は大スキ！

フォーク万歳！

この映画のテーマ曲は『イムジン河』。これはいうまでもなく、『帰って来たヨッパライ』が大反響を呼んだザ・フォーク・クルセダーズが歌いレコード化したものの、「発売中止」となった曰く付きの歌。そしてこの曲の代わりに1968年3月発売された『悲しくてやりきれない』が大ヒット。大学2回生の私たちは毎日のようにこの歌を歌っていたものだ。途中変更はあるものの、このザ・フォーク・クルセダーズのメンバーだった加藤和彦、北山修、はしだのりひこは今ではみんな大御所(?)となっているが、あの当時はいかにも頼りなさそうなフーテン学生……？ おまけにこの映画に登場する「坂崎」は現在のアルフィーのメンバーである坂崎幸之助。多くの学生がベトナム反戦を唱えてデモ行進をしていた時、彼はきつとギターの練習に精を出していたのだろう……？

グループサウンズ出身で今でも大活躍の堺正章や井上順そして今やフォーク界の大御所となっている井上陽水や南こうせつ、森山良子らを含め、あの時代の歌

手たちはみんな本物だった！

観客層は？

私が観たのは日曜日の昼間だったが、意外にも客席はほぼ満杯。ところが観客層には明らかな特徴がある。それは、「夫婦50割引」の利用者だろうと思われる夫婦連れを含め、年輩者が圧倒的に多いこと。多数の高校生が主役として登場する映画にしては珍しい現象だが、それは、きっとこの観客たちはこの映画になつかしさを感じて観に来ているということだろう……。

1968年は最高の時代！

1968年は私にとって大学2回生そして19歳の年。青春まっさかりで自由を謳歌していた人生最高の時代だ！ 1967年4月の大学入学以降、学生運動に明け暮れた私の学生生活は不規則そのもので、下宿には友人が入りびたる毎日だった。そのうえ1968年の秋以降は、大学の「全学封鎖」によって大学の授業も事実上なくなり、24時間すべてが自由な時間。今から思えば、そんな最高の時代だったのが1968年。

1968年は近代都市法成立の時代

私は今年56歳となったが、ここ20年間の私の弁護士としてのライフワークは都市問題。そしてその中核となる法律が都市計画法だが、その都市計画法が成立したのが1968年。建築基準法の大改正と翌1969年の都市再開発法の制定と合わせて「近代都市法」の成立といわれている。

この1968年という年は、1972年に「日本列島改造論」をひっさげて佐藤内閣の後を引き継いだ田中角栄氏が「都市政策大綱」を発表し、その後の自民党政治と日本国のあり方を規定した時代でもあった。その都市計画法も2000（平成12）年に32年ぶりの大改正がされたし、今年2005年は戦後60年という節目の年。1945年の敗戦から1968年までそして1968年から2005年までを、1949年に生まれた私の今日までの軌跡と日本の都市計画法を中心としたまちづくり法の軌跡をたどりながら考えてみれば、1968年という年がいかに大きなターニング・ポイントの年であ

ったかがよくわかるというものだ。

日朝高校生対決の構図は？

この映画の一方の主人公たちは、アンソン（高岡蒼佑）を中心とする京都の朝鮮高校の高校生たち。その朝鮮高校といつも対決しているのが府立東高校の空手部で、両者はいつもケンカばかり。本来なら空手部の方が強いはずだと思うのだが、やはりケンカは気合い！ パッチギ（頭突き）を最大の得意技とするアンソンやその兄弟分のもトキ・バンホー（波岡一喜）や弟分のチェドキ（尾上寛之）らは意外に手強く、「日朝対決」はいつも朝鮮側の勝ち！ この映画におけるこの「対決」構造は、あの『ウエスト・サイド物語』（61年）におけるシャーク団とジェット団の対決と全く同じ！

ロミオは誰？ そしてジュリエットは誰？

もう一方の主演は、府立東高校の松山康介（塩谷瞬）。こちらは空手部とは全く無関係だし、「日朝対決」にも興味のない、あの当時の言葉で言えば「ノンポリ学生」（解説なしでわかるかな？）。松山が仰せつかった大役は、毛沢東を信奉しているケツタイな教師（あの当時、たしかにそういう一派がいた！）から命ぜられた、対決する両高校の間に日朝交流の親善サッカー試合をやろうという申し込みの使者。恐る恐る出かけていった松山は、朝鮮高校の吹奏楽団が演奏する『イムジン河』のメロディーをはじめて聴くとともに、その中でフルートを吹いていたキョンジャ（沢尻エリカ）を見初めてしまった。

ところが何とこのキョンジャは、朝鮮高校の番長アンソンの妹だったから、さてどうなることやら……？ したがって、この映画でのロミオ役は松山、そしてジュリエット役はキョンジャ。

2人の恋の行方は？

モンタギュー家とキャピュレット家の対立はあってもロミオとジュリエットは愛し合い、またシャーク団とジェット団の対立はあってもトニー（リチャード・バイマー）とシャーク団のボスであるベルナルド（ジョージ・チャキリス）の妹

マリア（ナタリー・ウッド）が愛し合ったように、府立東高校の松山と朝鮮高校のキョンジャは次第に近づいていった。松山も恋の道にかけては意外にしっかりしたもの。オドオドしながらも直接名前を聞いたり、デート申し込みの電話をかけたり……。松山が公式に（？）キョンジャの家族たちの前に姿を見せたのは、アンソンが北朝鮮へ帰る決意をしたために開催された円山公園での送別会の席。坂崎（オダギリジョー）からギターを教わり、『イムジン河』の弾き語りができるようになった松山はギターを抱えてこの場を訪れ、北朝鮮の人々の前でキョンジャと2人で堂々と『イムジン河』をセッション……。

思わず涙ぐみながらこれを聴いたアンソンやキョンジャの家族・友人たちは、快く松山を受け入れることに。

しかし、朝鮮人のキョンジャと日本人の松山との恋の行方はそれほど甘くはない！『ロミオとジュリエット』におけるバルコニーでの恋の告白シーンよろしく、服を着たまま川の中に入りこみ、川を渡って対岸でフルートの練習をしていたキョンジャに対して「付き合ってくれへんか」と告白した松山だったが、「もしも結婚することになったら、朝鮮人になれる？」との問いに対して明確な回答をすることは到底できないことだった。

民族問題はホントは深刻！

日朝の「高校生対決」はエスカレートし、遂にチェドキが死亡。これは『ロミオとジュリエット』におけるティボルトの死亡や、『ウエスト・サイド物語』におけるベルナルドの死亡と同じストーリー仕立てだが、面白い（？）のは、そのお葬式において、きわめて深刻な民族問題が在日朝鮮人の長老の口から語られること。チェドキの伯父さんは無理矢理日本に連行され、劣悪な環境のもとで奴隷のように働かされた体験の持ち主。したがって、いくら松山がチェドキたちの仲間に溶けこんでいるとはいっても、チェドキのお葬式に日本人が出席することは耐えられないことだった。

みんなが参列している葬儀の場で伯父さんが語る言葉は、まさに「血の言葉」であり、絶対的な重みのあるもの。松山はもちろん誰も反論することなどできないものだった。自分の無力さを痛感させられた松山は、大切なギターを橋桁に叩

きつけ、川の中へ捨ててしまったが……。

でも音楽はいい！

1968年当時は素人ミュージシャン(?)大はやりの時代。とくにフォークはそうだった。松山が円山公園で歌った『イムジン河』を聴いてこれに興味をもったKBS ラジオのディレクターは、松山にラジオ番組でのフォーク大会への参加を呼びかけ待っていた。しかし考えてみれば、その当時『イムジン河』は発売中止とされていたのだから、この曲をラジオ番組で歌うというのは大変なこと！

そこで当然、このディレクターには圧力がかかることになった。これは、現在朝日新聞の報道に端を発して世間を騒がせている、「NHK への政治的圧力問題」と同じようなものだ。しかしこのディレクターは偉い！ 文句をつけてきた上司に対してクビを覚悟で敢然と立ち向かい、松山に『イムジン河』をスタジオで歌わせることに。

これを聴いたキョンジャは、チェドキの葬儀の席にラジオを持っていき、松山が歌う『イムジン河』の声を参列するみんなに聴かせたが……。さて、北朝鮮のみんなはどんな思いでこの歌を聴いたのだろうか……？

登場人物たちの多彩さは見モノ！

この映画を観ていると書きたいことが次々といっぱい浮かんでくる。それはなぜかという、時代や歌がなつかしく、またストーリー展開が面白いこともあるが、多くの登場人物たちの人物像がそれぞれ个性的で面白くそれぞれに魅力的(?)なこと。朝鮮高校の番長であるアンソンをはじめとするツッパリ高校生たちはいつの時代でも共通するキャラクターだろうが、1968年という時代だったからこそ存在していたことが確実と思われる個性の人物が次々と登場するから面白くてたまらない。登場人物の多彩さは朝鮮側も日本側も同じ(?)だから、その面白さを十分味わってもらいたいものだ。

私が特に注目したのは、「アルフィー」の名ギタリストの坂崎幸之助が実名で登場すること。アンソンに『イムジン河』を教え、ギターの手ほどきをするのは、何と1954年生まれの坂崎幸之助なのだ。ちなみに『イムジン河』が発売中止とな

ったのは彼が中学2年生の時で、すごいショックだったとパンフレットで語られている。

「死語」多数！

この映画のパンフレットは800円だが、内容豊富で今風に言えばメチャ値打ちがある。その中でも特に面白いのは、4頁にわたって掲載されている当時のなつかしい言葉の数々。アンソンたち高校生に毛沢東主義を教える教師は、「赤尾の豆タン」（さてこれがわかる人は何人いるだろうか？）と同じ色・大きさの「毛沢東語録」をかざしているし、「11PMで大橋巨泉も言うよったよ」「フリーセックスの時代が始まったって」「わし、三匹の侍見たいねん」「女体の神秘」から『『中核』ヘルメット』『全共闘』まで、今では「死語」となってしまう言葉がこの映画では多数飛びかっている。前宣伝だけを見てなつかしさを覚えてこの映画を観に来た多くの年配客たちは、きっとこれらの言葉のオンパレードを聞いて大満足だろう……。

ちなみに、最後の「出入り」に向けて府立東高校の空手部員が語っていた、「日本が鬼畜米英に負けたんも ABCD 包囲網」という言葉、今の若者は何のことかわかるかな……？

井筒和幸監督大好き！

井筒和幸監督は1952年生まれだから、私より3年後輩になるが、ほぼ同年代。したがって『イムジン河』は高校生の時に聴いたのだろう。彼の代表作は『岸和田少年愚連隊』（96年）だが、この当時私はそれほど真面目に（？）映画館に通っていなかったから、ブルーリボン作品賞に輝いたこの「名作」をはじめとして井筒作品は全然知らなかった。

私をはじめ井筒監督作品を観て感心したのは『ゲロッパ！』（03年）。これはとてつもなく面白い作品だった（『シネマルーム3』340頁参照）。この『パッチギ！』もその延長にある、ちょっとマンガ風でそれでいて本質をズバリ、そしてちょっと泣かせる映画……？

2005(平成17)年2月1日記